

小学校における「異年齢集団による交流」の現状

－兵庫県・中西播地域での調査を手がかりに－

毛利 猛・北村 正巳*・高田 信也**
(学校教育) (神戸学院大学非常勤講師) (姫路市立蒔野小学校)

760-8522 高松市幸町1-1 香川大学教育学部

*651-2180 神戸市西区伊川谷町有瀬518 神戸学院大学

**671-2106 姫路市夢前町蒔野299-2 姫路市立蒔野小学校

Actual Trends of “Across Age Groups Activities” in Primary School:

Findings from Survey in Midwest Harima Region in Hyogo Prefecture

Takeshi Mouri, Masami Kitamura and Shinnya Takata

Faculty of Education, Kagawa University, 1-1 Saiwai-cho, Takamatsu 760-8522

**Kobe Gakuin University, 518, Arise, Ikawadani-cho, Nishi-ku, Kobe 651-2180*

***Azono Primary School, 299-2, Azono, Yumesaki-cho, Himeji 671-2106*

要旨 本論文は、平成24年度に実施した兵庫県・中西播地域の公立小学校における「異年齢集団による交流」に関するアンケート調査、その後の姫路市の公立小学校への問い合わせを手がかりに、小学校をめぐる新しい状況変化のなかでの「異年齢集団による交流」の取り組みの現状を明らかにするものである。

キーワード 小学校 異年齢集団による交流 縦割り班 ペア学年 兄弟学級

1. 調査研究の目的

子どもたちが放課後や休日に戸外で群れて遊ぶなくなるにつれて、彼らの仲間集団のあり方は、大きな変貌を遂げてきた。いまでは、地域における異年齢の遊び仲間集団の自然形成が難しくなっており、小学校において意図的に異学年の仲間集団を組織し、上級生と下級生の交流を図ろうとする取り組みが行われている。

1年生～6年生で構成された異学年の小グループで、上級生がこのグループのリーダーと

なる「縦割り班」の活動や、1-6年生、2-5年生、3-4年生というような2学年の組み合わせのなかで、上級生と下級生の一对一の関わりを重視するペア学年・兄弟学級の活動は、子どもの社会性を育成しようとする教師たちの、それぞれの学校の創意工夫を生かした教育活動として、高度経済成長の終わり頃から全国の小学校に徐々に広がっていったものであり、私たちが平成14年に調査した時点¹⁾で、「縦割り班」活動は、小規模校を中心に全国のおよそ3/4の小学校で実践され、ペア学年・兄弟学

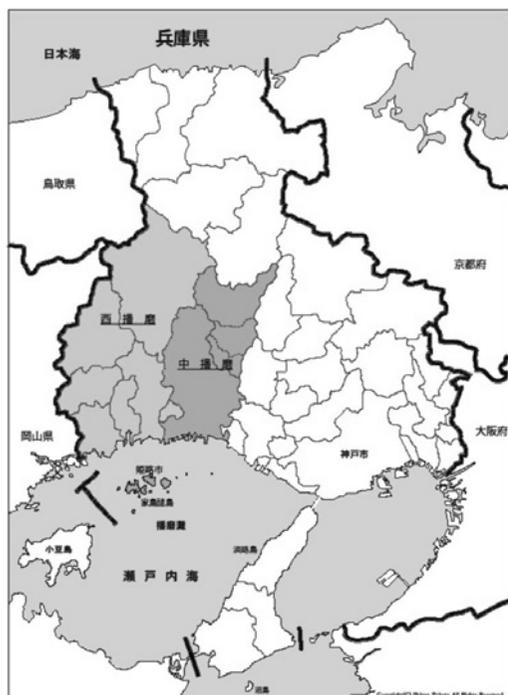


図1 中西播地図

級の活動は、大規模校を中心に全国のおよそ1/4の小学校で実践されていた。ところが、こうした「異年齢集団による交流」の取り組みは、その後、大きな「転換期」を迎えることになった。これに取り組むことの意義はますます高まっているにもかかわらず、学校で取り組むための「条件」が急激に悪化していったのである。

私たちは、平成24年10月～11月にかけて、兵庫県・中西播地域の公立小学校における「異年齢集団による交流」の取り組みに関するアンケート調査を行った。さらに姫路市内の公立小学校69校については、その後にアンケートの未回収校への問い合わせを行った。本論文は、これらの調査を手がかりに、小学校をめぐる新しい状況変化のなかでの「異年齢集団による交流」の現状を明らかにするものである。

2. 調査の概要

(1) 調査対象校

兵庫県・中西播地域の公立小学校154校。回

答は、各学校の特別活動主任（または担当）の先生に依頼した。

(2) 調査時期

2012年10～11月

(3) 調査方法

郵送により調査表を配布，郵便で回収。

(4) 発送数，回収数

発送数154，回収数86，うち有効回答86（有効回収率55.8%）。

3. 調査結果 1－中西播地域の取り組みの現状

(1) 回答校の属性

①所在地

調査校の所在地別の発送数と回収数は表1のとおりである。中播磨地域（姫路市，神崎郡）と西播磨地域を比べると，中播磨地域の回収率がやや高い。

②学校規模

回答校86校の学校規模は表2に示すとおりである。ここでは学級数（特別支援学級の数には含まない）によって学校規模を三つに区分した。この区分のうち，小規模校は，1年～6年までの学級数が11学級以下，中規模校は12～17学級，大規模校は，18学級以上の学校である。

表1 所在地別集計

所在地		発送数	回収数	回収率(%)
中播磨	姫路市	69	39	60.7
	神河町	7	6	
	市川町	4	3	
	福崎町	4	3	
西播磨	相生市	7	4	50
	たつの市	18	13	
	赤穂市	10	5	
	宍粟市	18	6	
	太子町	4	2	
	上郡町	3	1	
佐用町	10	4		
計		154	86	55.8

表2 回答校の学校規模

小規模校	中規模校	大規模校	計
44	24	18	86

(2) 「異年齢集団による交流」の実施状況

① 「縦割り班」を編成し、活動しているか

1年～6年からなる「縦割り班」を編成し、活動している小学校は、回答校86校中の62校で、割合でいうと72.1%であった(図2-1)。平成14年の全国調査の編成率76%と比べて、やや低い数値である(図2-2)。「縦割り班」の

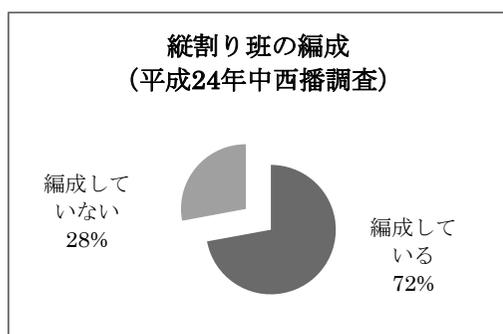


図2-1

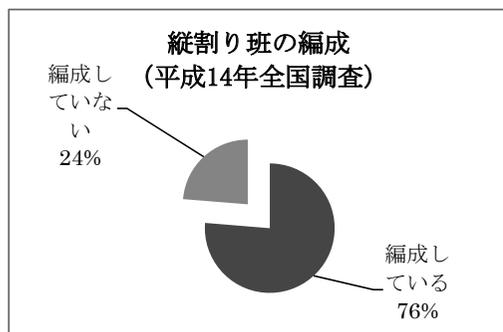


図2-2

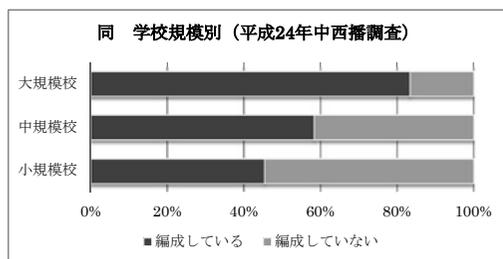


図3

編成状況を学校規模別にみると図3のとおりである。この図に示すとおり、小規模校で「縦割り班」を編成し、活動している割合が高い。

② ペア学年・兄弟学級を編成し、活動しているか

ペア学年・兄弟学級を編成し、活動している小学校は、回答校86校中の49校で、割合でいうと57.0%であった(図4-1)。ペア学年・兄弟学級の編成率については、平成14年の全国調査と比べて(図4-2)、31ポイントも高くなっ

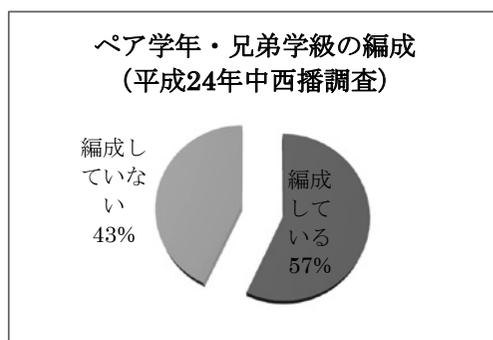


図4-1

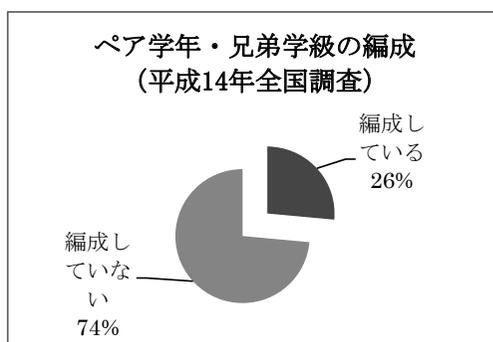


図4-2

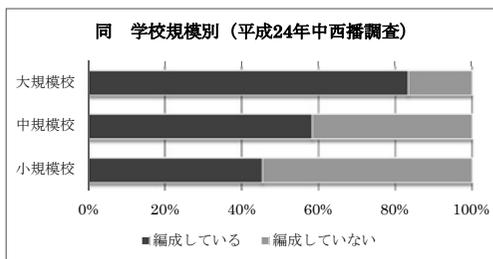


図5



図6 ペア学年による活動(1年生を迎える会)

ている。平成24年の中西播地域におけるペア学年・兄弟学級の編成状況を学校規模別にみると図5のとおりである。比較的規模の大きい学校は、ペア学年・兄弟学級による交流活動に取り組んでいる学校が多い。

③地域ごとの集団を使って、活動しているか
地域ごとの集団(子ども会、登校班など)を使って、活動している小学校は、回答校86校中の41校で、割合でいうと47.7%であった(図7)。地域ごとの集団の編成状況を学校規模別にみると図8のとおりである。

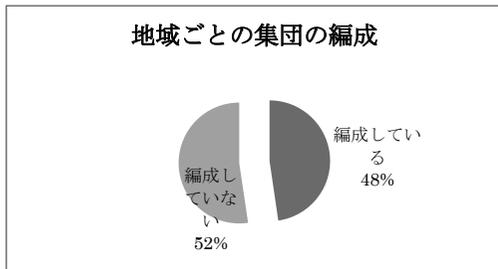


図7

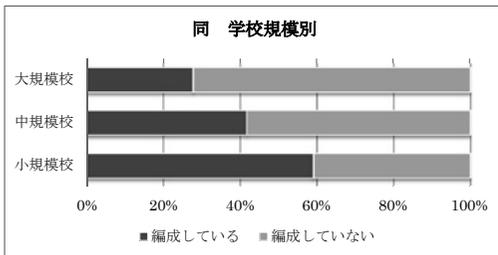


図8

以上、「縦割り班」、ペア学年・兄弟学級、地域ごとの集団という、3つのタイプの異年齢集団の編成状況と、学校規模との相性についてまとめると、「縦割り班」活動は、小規模校向きの異年齢集団活動。ペア学年・兄弟学級による活動は、大規模校向きの異年齢集団活動であることが分かる。地域ごとの集団による活動も、どちらかという大規模校より中規模校、中規模校よりも小規模校に向けた活動である。

3つのタイプの異年齢集団の編成状況について、分かったことがもう一つある。私たちは、平成24年度に兵庫県・中西播地域で行った調査と同様のものを、平成23年度に香川県下でも行っている(毛利2013)。これらの調査結果と平成14年度に実施した全国調査と比較すると、近年、上級生と下級生の一对一の関わりを重視するペア学年・兄弟学級の活動が急速に普及しつつあることが分かった。

(3) ペア学年、兄弟学級の組み合わせ

学年ないし学級の組み合わせは、理論上は全部で15通りがあるが、ペア学年、兄弟学級を編成している小学校49校のうち、実際の組み合わせは、以下の通りである。

- <1-6, 2-4, 3-5>の組み合わせ…23校
- <1-6, 2-5, 3-4>の組み合わせ…9校
- <1-2, 3-4, 5-6>の組み合わせ…5校
- <1-6>のみの組み合わせ…8校
- その他の組み合わせ…4校

ほとんどの学校が、1年と6年の組み合わせ(ペア)を基本にしており、あと2年~5年の組み合わせは、<2-4, 3-5>と<2-5, 3-4>の2パターンに分かれる。その他の組み合わせのなかには、二つ以上の組み合わせを活動によって使い分けている学校もある。

1年と6年の組み合わせ(ペア)が多いということは、教師がこの組み合わせの相性のよさと、このペアによる交流の教育的効果を認めているからであろう。

4. 調査結果 2－姫路市における編成状況マップ

(1) 姫路市内の小学校の学校規模

平成24年10月～11月にかけて実施したアンケート調査の対象校である中西播地域の公立小学校154校のうち、とくに姫路市の公立小学校69校については、アンケートの未回収校(30校)にも直接問い合わせる等の方法で、全69校の「縦割り班」、ペア学年・兄弟学級、地域ごとの集団の編成状況に関するデータを網羅的に収集することができた²⁾。

姫路市内の公立小学校69校の学校規模は、下の表3に示すとおりである。姫路市には、市街地とその周辺の比較的規模の大きい学校と山間部の比較的規模の小さい学校がバランスよく存在する。

表3 姫路市の公立小学校の学校規模

小規模校	中規模校	大規模校	計
21	21	27	69

下の2枚の地図は、兵庫県の中での姫路市の位置を示した地図(図9)と、姫路市(69小学校区)に、小規模校、中規模校、大規模校がどのように付置しているかを示した地図(図10)である。

平成24年10月～11月に実施したアンケート調査の未回収校の多くは中規模校と大規模校であった(回収率は学校規模が大きくなるほど下がる)ので、この調査によって得られた結果は、どちらかと言えば小規模校の現状をより強く映し出すものであった。姫路市内という限られた地域ではあるが、小規模～大規模校がバランスよく存在する地域の悉皆調査ができたことの意味は大きい。

(2) 異年齢集団の編成状況

姫路市内の公立小学校における「縦割り班」、ペア学年・兄弟学級、地域ごとの集団という3つの異年齢集団の編成状況は、下の図11～13に示したとおりである。それぞれの異年齢集団と学校規模との関係について言えば、「縦割り班」

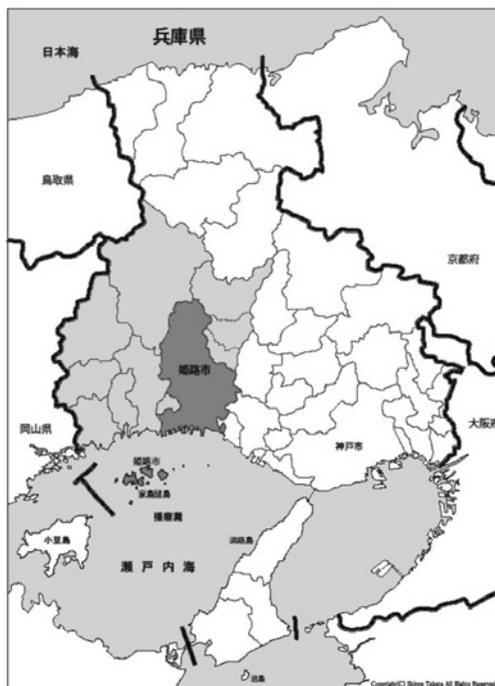


図9 姫路市の位置

○姫路市の69小学校区 規模別

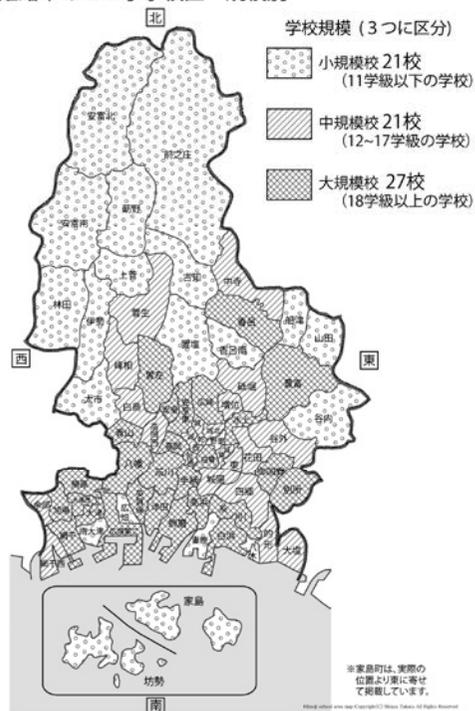


図10

の編成率は、学校規模が小さくなるほど高くなり、その逆に、ペア学年・兄弟学級の編成率は、学校規模が大きくなるほど高くなる。地域ごとの集団の編成率は、中規模校で最も低くなっている。

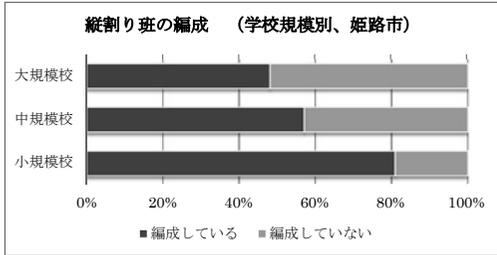


図11

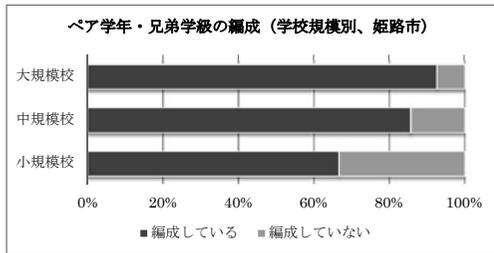


図12

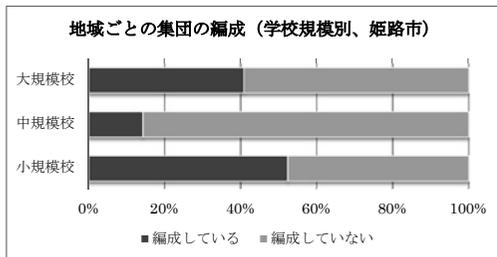


図13

係が、視覚的によく理解できる。

まず、「縦割り班」の編成状況のマップ(図14)を見ると、山間部の小規模校では、「○編成している」の記号が高い割合でついており、中規模校では、「■編成していない」の記号の割合が高くなる。市街地とその周辺の大規模校では、その割合がさらに高くなるのが分かる。

次に、ペア学年・兄弟学級の編成状況のマップ(図15)を見ると、市街地とその周辺の大規模校には、「○編成している」の記号が高い割合でついており、逆に、山間部の小規模校には、「■編成していない」の記号が高い割合でついていくことが分かる。

○縦割り班の編成(姫路市69校)

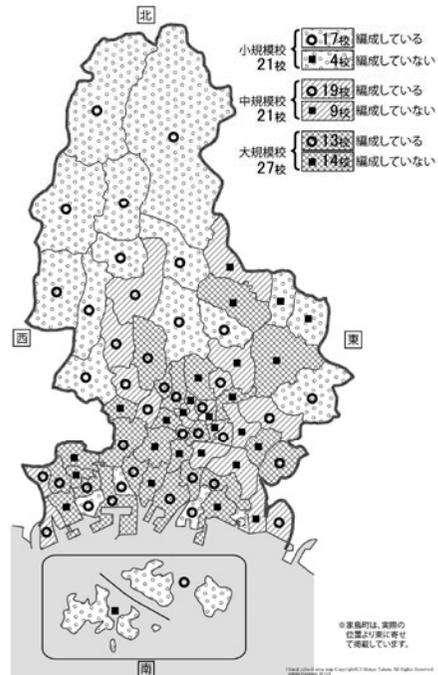


図14

(3) 編成状況マップ

姫路市内の公立小学校における「縦割り班」およびペア学年・兄弟学級の編成状況を、図案化されたマップの上で一望俯瞰的に示したものが、次の2つの図である。学校規模を模様別に示した小学校区の上に、「○編成している」「■編成していない」の記号を重ねてみると、それぞれの異年齢集団の編成状況と学校規模との関

○ペア学年・兄弟学級の編成(姫路市69校)

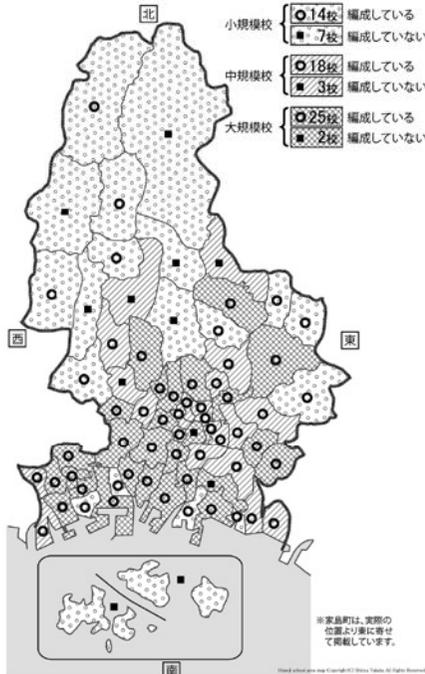


図15

5. 転換期の「異年齢集団による交流」
—まともにかえて

3-(2)のところでも述べたように、この10年間で、中・大規模校を中心にペア学年・兄弟学級の取り組みが急速に普及していることは注目に値する。少し乱暴かもしれないが、小学校をめぐる新しい状況変化のなかで、「縦割り班」活動の取り組みが全国の小学校に普及していった局面から、ペア学年・兄弟学級の活動が普及しつつある局面への転換期に差しかかっていると看做してもよいかもしれない。では、なぜ今、ペア学年・兄弟学級の取り組みが普及しつつあるのか。

上級生がグループのリーダーとなる「縦割り班」と比べて、ペア学年・兄弟学級では、上級生と下級生の一対一の関わりが重視される。どちらが上級生にとっての負担が大きいのか、また、教師にとっての関与の仕方が難しいかは明らかだろう。「縦割り班」活動におけるトラブ

ルの多くは、上級生と下級生がそれぞれの役割—リーダーおよびフォロワーとしての役割—をうまく果たせないことから生じている。社会性の低下した子どもたちにとって、また、多忙感を強めている教師にとって、「縦割り班」活動は、いわばハードルの高い活動になりつつあるのかもしれない。

そもそも、「縦割り班」のなかで期待されている上級生の役割と、ペア学年・兄弟学級という一対一の関わりをなかで期待されている役割は、かなり違っている。一方は、下級生のことを配慮しつつ、集団活動の全体を「仕切る」リーダーとしての役割であり、他方は、よいお兄さん・お姉さんとしての役割である。お兄さん・お姉さんの目に映る下級生は、自分によくなついてくれるかわいいい弟や妹であるが、異年齢集団のリーダーである上級生の目に映る下級生は、その都度の活動の目的に対して、勝手な動きをする中学年や足手まといとなる低学年なのである。それぞれの立場で期待される上級生の役割は、重なり合いつつも、かなり違っている。また、この役割を果たすことで育成される社会性についても、そのレベルや中身を問えば、実は、微妙に異なるものである。言ってみれば、一対一の関係のなかで6年生が1年生に頼られ、彼らの世話をすることで身につける力や自信(自己有用感)は、異年齢集団のリーダーとしての経験を通して身につける力や自信とくらべて、社会性のより基礎的な部分に関わっているように思う。

異年齢集団活動が、子どもの社会性の発達にとって、大きい意味を持っていることは間違いない。ただし、おおざっぱに「社会性」の育成に役立つと言ってみても、「縦割り班」の活動とペア学年・兄弟学級の活動では、どういうレベルの社会性のどういう部分の育成に役立つのかを問題にすれば、その役立ち方が微妙に異なっているはずである。

先ほど、小学校をめぐる新しい状況変化のなかで、「縦割り班」活動の取り組みが全国の小学校に普及していった局面から、ペア学年・兄弟学級の活動が普及しつつある局面への転換期

に差しかかっていると述べたが、この10年間で、「縦割り班」活動をやめてペア学年・兄弟学級の活動を始めた学校は、それほど多くない。むしろ多いのは、「縦割り班」活動のなかにペア学年・兄弟学級の活動を組み込むことで「異年齢集団による交流」を全体として活性化させている小規模校と、これまで学校をあげて異年齢集団活動に取り組んでいなかったが、新しくペア学年、兄弟学級による活動を始めた中・大規模校である。今後は、こうしたペア学年・兄弟学級を中心とした取り組みを充実させるための条件、学校現場の工夫を明らかにしていきたいと考えている。

註

- 1) 私たちは、平成14年12月から翌年1月にかけて、全国の小学校の4%に当たる940校を抽出して「縦割り班」およびペア学年・兄弟学級の編成状況や活動内容等について調査した。この時点での、「縦割り班」を中心とした異年齢集団活動の現状と課題については、下の参考文献1) 毛利猛(2007)に詳しい。
- 2) 筆者の一人である北村は、昭和49年から37年間、姫路市内の小学校に教諭として勤務してきた。そのおかげで姫路市内のほとんどの小学校に知り合いの教員がおり、異年齢集団の編成状況について問い合わせることができた。

参考文献

- 1) 毛利猛(2007)『小学校における「縦割り班」活動』ナカニシヤ出版
- 2) 毛利猛(2013)「小学校における「異年齢集団による交流」に関する研究－香川県下の取組みの調査を手がかりに－」香川大学教育実践総合研究第26号, 15-26